雨の降る日、わたくしは先生のお写真の前に坐っていた。

もう、先生にお礼を申し上げることも出来なくなってしまったのである。

—三八・七・一一—

（昭和二十三年三月卒、大阪工業大学助教授）

後藤先生と御所

岡本彦一

それは去年の十一月七日であった。

毎年春秋に京都御所が公開される。そのつど、拝観に行きたいと思いながら、なかなか実行できないでいる。この日はうまいことに自由な時間がもてた。この機会をのがさず出かけた。

宜秋門から入って、御車寄から諸太夫間まできた。ここには人形がかざってある。ぼんやりとそれを眺めていたら、そこに後藤先生がおいでになった。先生もそう熱心に御覧になっているようには思えなかった。御挨拶をして、皇学館大学のお話をしたら「誰にききましたか」とおっしゃった。「まだ誰にも話してないのですがね」ともおっしゃった。わたくしもあまりくわしい事は聞いていなかったので、伊勢の方へ行っておしまいになると、何だか京都がさびしくなるような気がしたし、先生もこうして気様に京都の街をおあるきになるということもなくなるのではないか、と思ったので、ついそういう話を出してしまった。やはり、この話題は先生をさびしくさせたような気がしたので、そうそうにひっこめた。そして、あまりものをいわずに先生についてあるくことにした。

新御車寄から、月華門、建礼門を前をぐるりとまわって、日華門から紫宸殿の前に出た。この南庭に立って紫宸殿の屋根をしげしげと見上げた。先生も同じく眺めておられる。戦後はじめて公開したときは紫宸殿の簀子に板が敷いてあって、その上を渡ったことがあった。いまは南庭を横ぎる。そんなつまらない事をわたくしはいった。

清涼殿では時間をかけた。先生は何を考えつつ御覧になっていたか、それはわからない。しかし、われわれ二人は、口に出しては、らちもない事を多く語った。殿上の間の日当りのわるいこと、狭いこと。掃除が行きとどいてないことなど。先生にとっては珍らしいところではないが、しげしげと見た。鬼間、台盤所、朝餉間、東へまわって荒海障子、昆明池障子。燈籠が低くつるしてあって一列に並んでいることに感心したり、昼御座をのぞき込んだり。

外人カメラマンが熱心に撮影していた。わたくしもカメラをもってきたらよかったなどと思った。

小御所の前でもお庭を眺めて立ちつくした。先生は今の学生に古典の読解力のないことをなげかれた。それに対してわたくしは、それは戦後のすばやい時勢の流れで仕方がないといい切ってしまった。

先生は「わたしは平家や太平記のような長いものが好きです」とおっしゃった。これはずい分前にもお聞きしたことがある。「和歌のようなものも、それはよいでしょうがね」ともおっしゃる。これには何ともかえすことばがない。ゆらい、わたくしは外国文学でも「戦争と平和」とか、日本のものでも「夜明け前」とか、ああいう手のものはにが手だ。だが、和歌・連歌・俳諧にばかりこりかたまっているわけではないのだが。

御学問所から御常御殿、ほんとにこの日は

御所のなかでゆっくりいた。拝観終了の鐘の音にしかたなくひきあげた。出がけに先生はおみやげにお菓子をお買いになった。わたくしは道喜のちまきを買った。（昭和二十一年九月卒、京都市立堀川高校教諭）

後藤丹治先生を憶う

柿谷雄三

後藤丹治先生がお亡くなりになられたといふことは、わたくしにとってかなりな打撃であった。先年龍谷大学でお倒れになったことがあったと、ある人から聞いてはゐたが、その後お元気になられたといふことだし、御著書もつぎつぎとお出しになるし、また本年度から皇学館大学の方へも御出講になると聞いてゐたので、このところは大変お元気だと思い込んでゐた。そこへの訃報はあまりにも急なこととて、到底本当とは思はれなかった。ともあれ、今ここにこのやうな一文を草さなければならなくなってしまったことは、何としても悲しいかぎりといはねばならない。思いつくままに、先生のことども一つ二つを記して先生を偲びたいと思ふ。

わたくしは在学中、専攻する時代が違っていた関係上、先生のお宅へはあまりお伺いすることはなかった。ために残念ながら手にとっての御指導を仰ぐ機会にはめぐまれなかった。しかしながら、教室において、またその優れた数々の御著述や論文を通じて、学問研究がいかなるものであるかをお教へくださった御恩は実に測り知れないものがある。謹厳実直な御人格と、手堅い実証主義の御学風は、わたくしの「心の師文」として常に敬慕申しあげていたところであった。あの折目正しい徹底した御講義ぶりは先生のお人柄をよく表はしていたし、聴講するわれわれはほんとに息もつぐ間がないぐらいであった。

先生はまた朗読がお上手であられた。先生の講じられた平家物語、太平記、雨月物語、それに滝口入道などといった諸作品は実に名文の箇所が多いが、それらをよく独特の節をつけてお読みになったものである。静まりかへった教室に朗々と先生のお声が流れるあの瞬間は、先生の講筵に列った誰しもが、終生忘れえないことであらう。今も先生のお声が耳もとに聞えてくるやうな気がしてならない。

わたくしはここ一、二年平家物語を教へることとなったのであるが、これも何かの因縁であらう。それも大学院で承った「日本文学作品研究――平家物語――」のノートを参考とさせていただき、お教へを受けたいろいろのことを思い起しながら、たどたどしく進めているやうな次第である。昨秋十一月二十二日、清水泰先生の学位祝賀会の席で、先生にお目にかかった時、その事を申しあげ、お暇になれば集中講義にお越しいただいて、その不備を補っていただくやうお願い申していたのであるが、もうそれも永遠に実現できなくなってしまった。思えばその時が先生に最後にお目にかかる日となってしまうとは、誰が予想しえたであらうか。

ついこの間、文庫の整理をしてゐると、思いがけず先生のおはがきが出てきた。つれづれ草の文ではないが、「ただその折の心地」がして胸せまるものを覚えた。日附を見ると、昭和三十三年の「八月八日」とあり、たしか、先生の「椿説弓張月」上巻（日本古典文学大系）が上梓されたので、暑中お見舞か